



強く正しく明るく

八幡小だより

開校 150 周年目の山鹿市立八幡小学校

令和 6 年度学校だより No.15

2024.12.5 (木) 発行 校長 森 每恵



校訓「強く 正しく 明るく」 教育目標「ふるさとを愛し、夢の実現に向かって考動する児童の育成」
目指す児童像「強い子 正しい子 明るい子」

学びの姿が光る 5 年生！～水俣に学ぶ肥後っ子教室を通して環境・人権について考える～

11 月 26 日に水俣病資料館と水俣病情報センター、熊本県環境センターを訪問し、現地学習を深めた 5 年生。バス降車場所でお出迎えしたとき、古川げんのすけさんが「今までで一番真剣に勉強しました。とても集中したので疲れました。」と話してくれました。表情と言葉から一生懸命に学んだことがよく伝わり本当に嬉しく思いました。

5 年部の先生方と 1 ヶ月以上前から学習に取り組んできた子どもたち。話を聞いたり熱心に調べたりする中で、環境問題と人権問題が密接に関わっていることにも気づきました。

見学前日の帰りの会で、熊本県に住む私たちは、「水俣病をめぐる人権」と「ハンセン病回復者とその家族の方々の人権」について、正しく知り、我が身に引き寄せてしっかり考えなければならない課題の一つであることを伝えました。

現地で、水俣病資料館語り部の吉永理巳子さんから、水俣病患者家族としての体験や思いを伺い、しっかり受け止めて帰校した 5 年生。学んだことを自分なりに整理し、友達と考えを交流し正しいことや自分の考えを自分の言葉で伝えられる人になってほしいと思います。



5 年生～木工教室を通して環境について考える

11 月 7 日に、林業普及指導員の方々や、八幡校区の区長さんをはじめとする地域の方々にお手伝いいただき、地元のあや杉を使った本立てを作りました。木の香りや手触りに癒されながら、作品を仕上げ大喜びでした。

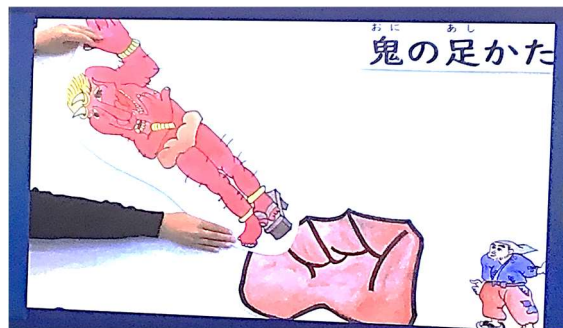


我が国の森林面積は、国土面積の 67% (約 2,502 万ヘクタール) を占めており、その約 4 割は人が植林した「人工林」です。調べたところ、天然林は 1990 年以降減少しているようです。森林は資源としてばかりでなく、土砂崩れなどの災害防止や、渇水・洪水緩和の水源かんよう機能、自然教育環境や癒やしの場としての働きなどがあり、森林保全に対する理解と維持活動は欠かせません。これを機会に、身の回りの環境にさらに興味や関心を持ってくれることを期待します。

長距離走で自分の心と体を鍛えています

12 月 13 日の長距離走大会に向け、子どもたちは目標を立て自己ベストを目指して取り組んでいます。今年は運動場も広く使えるようになったので、距離を一昨年に戻して練習しています。低学年は 1km、中学年は 1.8km、高学年は 2.5 km が目安です。熱い応援をどうぞよろしくお願いします。

図書委員会プレゼンツ 「パネルシアター」



オンライン児童集会で、声色や間合いを上手に使い分け、「鬼の足かた」のパネルシアターを見事に演じ切った図書委員会の子どもたち。練習の成果が十分に現れていて聞き入りました。視聴後の感想交流コーナーでは、その熱演ぶりに、話に引き込まれたと言う声が多く寄せられました。

水俣病資料館や水俣病情報センターを家族で訪れられませんか？水俣病発生の社会的背景、原因・原因究明の過程、被害の実態、患者さんや患者家族の方々に対する苛烈な予断や偏見・差別、誤った情報の流布で人がどれほど傷つけられてきたか、闘いの歴史、その後の人を繋ぐ取組や環境再生の取組（現在の水俣市は環境モデル都市となっています）等、学ぶことは数多くあります。同様のことが二度と繰り返されないよう、私たちは、大人も子どもも学び続けなければならないと思います。

【水俣病資料館ホームページより抜粋】

語り部制度は、1994年（平成6）10月から水俣病資料館で始まりました。水俣病資料館では、悲惨な公害を二度と起こしてほしくないという思いから、1993年（平成5）1月に、被害のひどさを、水俣病の患者さんから生の声で伝えていただこうと、語り部制度を始めることになりました。

語り部さんは、水俣病についてご自身が体験されたことについて、水俣病資料館を来館された方々にお話をされています。語り部さんのお話はビデオ化して貸し出し、水俣に来られない方々のために役立てられてもいます。語り部さんのお話は、水俣病で受けた苦しみや痛みを語りつぐだけでなく、患者さんがいじめ〔偏見〕や差別を受けてきた歴史があることから、今では人権の学習でも活用されています。



よしなび りみこ
吉永 理巳子 さん

1951年6月2日生まれ

1954年3歳の時に、父が急性劇症型の水俣病を発病。2年後に亡くなる。漁師であった祖父も9年間寝たきりであったが、1956年亡くなっている。1997年10月から水俣病資料館の「語り部」となる。リグラス工房「びんの風」主宰。2011年環境マイスターに認定。水俣病患者家族としての体験、勇気をもつ事の大切さなどを伝えている。

水俣病資料館語り部の会副会長。

水俣市明神町在住。

私は明神で生まれ育ちました。祖父は漁師で手漕ぎの船で漁をしていました。水俣病の発生当時、近所には4件しか家がなく、みんな畑で野菜を作り、漁に出て魚を捕ってきて食べる自給自足の豊かな生活をしていました。私の家族は祖父母、両親、兄弟4人の8人でした。父はチツソに勤めていました。まず、祖父が1948年頃発病。父も1951年36歳の頃発病しました。仕事が終われば魚を捕りに行き、刺身にして、お弁当にも持って行っていくほど魚が好きでした。チツソ付属病院に1年位入院しました。入院中は病院食を食べるので症状は進みません。退院したら、栄養をつけるため魚を食べていました。症状が重くなり、2回目入院した時は座墊がひどく、20日後、38歳で亡くなりました。それから一ヵ月後9年間寝たきりだった祖父も亡くなりました。

友達を家に連れてくることはあまりありませんでした。家族のことを話したくなかったからです。今思えば、自分の中で逃げていたんです。40年近く、水俣病という声が聞こえると耳を塞いでいました。15年前にもやい直しが始まり、水俣病に関する本を開き、もっと早くチツソの廃水が原因とわかっていただのに止めなかった国、止められなかったチツソのことを知りました。父の無念さはひとしおではなかったと思いました。水俣病の被害については調査されていません。早くに調査をすれば、症状や治療方法がわかってくるのにそれすらやっていない。事実をきちんと受け止めて対処しないといけない。それが水俣病の教訓だと思います。

【写真：海に向かって折る魂石】